

【ねがいましては】

第103号
平成10年3月24日

共和珠算学習塾

「命の大切さを」

最近の新聞やTVなどで、中学生をクローズアップしたものが多くの見受けられます。そのどれもが悪い傾向にあるように感じます。中学生たちによる犯罪は「こども」たちであるだけに、僅かであっても目立ちます。「いのち」というものの捉え方が社会ではどのように変化しているのか、今昔をたどりたくなりました。

まずメディアです。TVの発達は多くの情報を即座に手に入れることを可能にしました。あわせてアニメやドラマなどの内容にも短時間で大きな変化を遂げているようです。

以前は「死」というものに関して、「重み」というものがあったように思えていたのですが、さらにテレビゲームの登場により激変したように感じます。特に子どもを有する家族世帯では多くが所有しているようです。

西欧のある国では、子どもたちへの影響を考慮し、メディアやゲームに制限を加えているとのこと。言論の自由を前面に掲げる日本では議論を呼ぶと思われますが・・・。

子どもたちはそれぞれ自然（いのち）と戯れながら自らの生き方を模索していきます。昆虫や植物、動物たちから多くを学び、やがて「いのち」に敬いのこころを宿す。そして身近な家族たちの旅立ち（おじいちゃん、おばあちゃん）などに出会いながら自身に課せられた現実に気づき、徐々に社会の中での「責任」を学んでいきます。

体力たくましかった父や母が長い年月の経過とともに老け、じーじ、ばーばへと変化していく。命には順番があり、それはかけがえのないしあわせの順番であること。誰が教えることもなく、自然に学んでいくことです。

健康な体を育み、ひとの気持ちを察することのできる明るい子にと思うのは、ほとんどのお父さんお母さんの願いであることは至極当然のことです。

競争漬けとなっている今の教育システム、スポーツにしても勝負のみに偏ってみたり、どうやら譲りあうことや助け合うことなどは評価されにくいようです。

うそは絶対につかないぞ、ひとのこころを傷つけたりしないぞ。100人いたら100人があたりまえと思えることが、今、どうやら「破ったっていいじゃないか」の時代になっているように感じます。

この新浜の地にそろばんを初めて20年、学習を初めて10年、いま思うこと・・・オレがわたしがではなく、ふつととなりにいるひとの気持ちを察してあげられる「こころ」を伝えようと思うばかりです。

命は心でもある。こころを傷つけることは、いのちを削ることなり。いのちを大切にしましょう。特にとなりにいるひとの心をです。

君たち、お父さんやお母さんのこころの中をのぞいたことはありますか。友だちのこころの中をのぞいたことはありますか。

「損」だ「得」だばかり考えていないで、たった今、君のとなりにいるその人に「座ぶとんみたいにあったかいひとだね」って言われてみよう！（相田みつをさんの詩より）

お父様、お母様、ぜひこの機会にご家族で「やさしさ」や「おもいやり」について話し合う時間を持たれてはいかがでしょう。じっくりのんびり、忘れさせていた何かが見つかるかもしれません。